

樹木

1月

いもり池も雪をかむり

真っ白な世界

時々スキー場の音が降りて来る

一本の木が立つ

半身を雪で化粧し

葉のない枝々を空に目立たぬように
広げて立つ

静寂で控えめな樹木

しかし

凍えながらも内部の意思は熱く燃えている

一本の木が立つという事と

立ち続けるという事と

しきりに雪降る中

樹木は新しい空気を感知して

じつと待ち続ける

音

雪原のスノーシューの
枝から雪の
ウサギの
小鳥の

子ども達の
山の
光の
鼻歌の
春に少くし近づく

音・音・音

2月

3月

弥生色

国体の熱気がゲレンデに残る中
光はあちこちから動き出し
一滴の雫に
木々の冬芽に
人の心にも遊び始める

するとどうだろう
あんなにも厳寒の冬を
もう忘れたかのように
軽やかに動き出すから不思議だ

雪国の高原の空
見上げれば弥生色に流れる雲
はね馬を揺り起こせ

4月

春の流れ

春を萌芽した葦の下を
キラキラと光をのせ
幾筋もの曲線となって
いもり池に注ぎ込む
流れ続ける水

水芭蕉の群生が
魔法のように生長し
〈祈りの形〉で春を祝福する

水底や空、はね馬の山
そして君の心にも
春の流れ

5月

春の祝祭

緑の風を胸いっぱい
に吸い込み
動き始める
走り始める
それは春の喜びを表現する
本能の働き
身体が勝手に動き出す

空と草原
いもり池に
生まれたばかりの若葉にも
光のリレー
あらゆる生き物の躍動
はね馬も大地を蹴り上げて

春の祝祭

艸原祭

高原の春は賑やかだ

陽炎の中を

6月

帽子をかぶり
まるで森から突然現れた
美しい蝶のように
あなたは眩しいくらいの明るさを
連れてこの高原の駅に立つ

その笑顔の目の輝き
弾ける生の喜び

私はヘッセの少年の日の思い出のように
鼓動の強さに失神しそうになる
歳を重ねた今も
昆虫網を持ちこの感動を享受できる

私は蝶に見つめられたまま
何もできない
あなたは高原を散策し
帽子をかぶり
森の奥へと姿を消す美しい蝶のように
消えて行く
何ごともなかったように
眩しいくらいの明るさを連れて

帽子の姿を幾度も連想して
そこに立つ私
高原の風

7月

夏の高原

フキの葉を日よけに

森の小径を歩けば

夢見る気分

カッコーの声

スキップ踏み口笛吹いて

身体のリズム ルンルン

ノリウツギの花揺れて

夏が来た 高原に

彩られた世界に光は強く

現(うつつ)の浄土(じょうど)世界
大人まで童心となつて

いもり池に逆さ妙高

8月

記念碑

マッターホルンが視えない
スイス、ツエルマツト

山岳地域の夢の国のような街を歩くと

旧妙高高原町とこの村との

姉妹都市協定記念碑があった

1997年にこの村で調印されたという

碑には1968年5月10日と刻まれていた

燕温泉出身のプロスキーヤー植木毅さんが

モンブラン北壁をスキーで制覇した日だという

教会の鐘が街に鳴り響いた

妙高に住みながら今まで知らなかった

でも、何だか誇らしい

登山電車で登ったゴルナーグラード展望台から

氷河が視えた

ようやく少し姿を現したマッターホルンが

何故か妙高山に視えて来た

(2018年7月21日現地にて)

9月

推移

妙高山が雲の上に
顔をのぞかせた

「うん かなかの山だ」
すると

秋の虫が一斉に鳴き出した

翌日

初秋の高原を歩いた
トトロの気分になって

アケビ

マツムシソウ

シラヤマギク

夏の面影を残しながら

高原は深い秋の準備に余念がない
誰にも気づかれないように

10月

まっかな

ななかまどのまっかな
あかやきいろのはっぱの
のも やまも かわも
いろがむげんにひろがり
そらがふかまる

どうぶつたちのめ
みみ あし しっぽ
あしあと
さかながはねる

きーんとさえずる もずのごえの
いっせいにふかいあきへと
まっかなゆうひの
あしたへ

11月

百名山

「越後のみならず、私は日本の名山だと思っている」
深田久弥は『日本百名山』で妙高山を称えた
また、火打山も

登山家、小説家の彼は
六月の初めに妙高山に登り
赤倉温泉 椿荘和田に逗留、執筆した
客室三部屋だけの宿で

山は名山として今に至り
椿荘和田は廃業した

「百の頂きに百の喜びあり」 (注)

落葉地帯が上方から押し寄せる

注 深田久弥の言葉

追憶

私たちは知る
この月の意味を
生き物は知る
長い冬の始まりを
初雪に驚きながら！。
あるいは
冬眠中の半ば閉じられた意識の中で！。

遠くそして短い一年の追憶

高原の山と河と池の！。
風と雲と空の！。
春と夏と秋の！。

雪が降る

12月